



TITLE:

京大広報 No. 302

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 302. 京大広報 1985, 302: 15-22

ISSUE DATE:

1985-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209380>

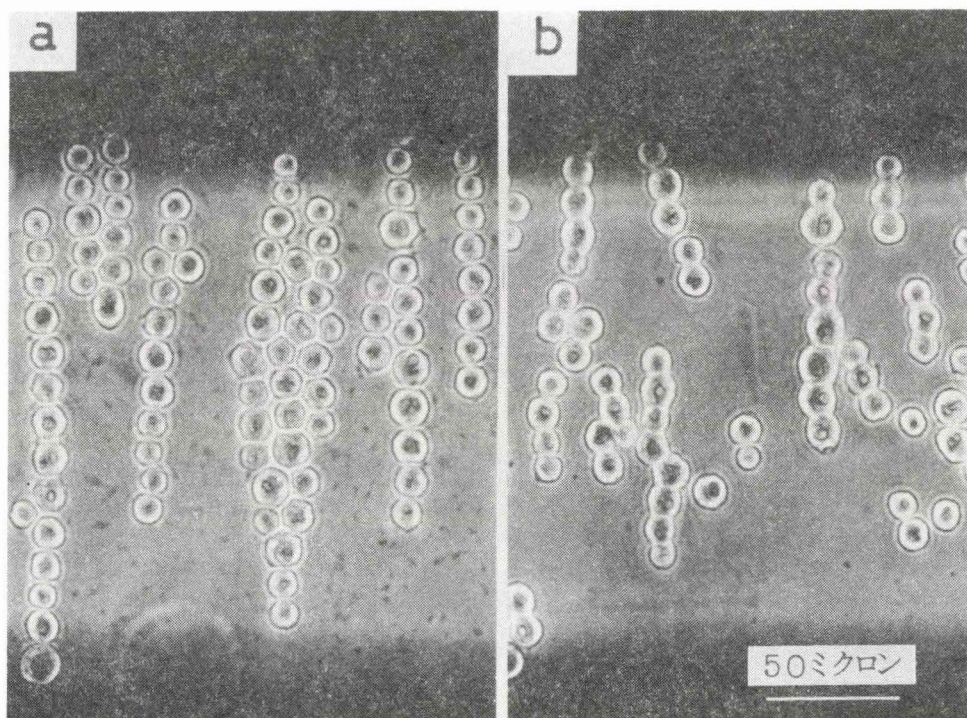
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 302

京都大学広報委員会



通電による細胞融合 — 関連記事本文19ページ —

(散在する培養細胞に電場を与えると細胞はネクレスの様に整列し(a), さらに強い通電によって細胞間の融合が起る(b)。)

目次

次期総長に西島安則教授を選出 16

学術講演会の開催 17

昭和60年度京都大学市民講座「生命を考える」

講演要旨Ⅲ 17

<紹介>

医学部生理学教室 19

<資料>

学術情報センターの創設に関する

国立大学協会の要望書 20

白馬山の家 of 冬季開設 21

訃報 21

<随想>

砂糖の話

名誉教授 木下 圭三 22

＜大学の動き＞

次期総長に西島安則教授を選出

現総長の任期満了（12月15日）に伴う次期総長候補者の選考が11月17日（日）開催の臨時評議会において行われ、その結果、西島安則教授（工学部高分子構造講座担当）が選ばれた。

総長候補者の選考は、選挙資格者による選挙の結果に基づいて評議会で行われる。今回の選挙は11月11日（月）午前9時から11月16日（土）正午までの郵便による投票と、11月16日、17日の両日にわたる各部局における投票によって行われた。開票は、評議会で選出された評議員8名の立会いのもとに、本部大会議室で行われた。

なお、今回の選挙では、第1次投票に対する選挙資格者は2,582名であり、第2次投票以降の有資格者は1,461名であった。

1 第1次投票

投票所における投票は、11月16日午後1時から同2時まで行われ、投票者数は、郵便による投票者104名を含め、1,552名であった。

この投票は、2名連記で、投票総数3,104票、うち有効投票数は2,909票、無効投票数は195票であり、次の16名が第1次総長候補者に選ばれた。

赤 井 浩 一	寺 本 英
朝 尾 直 弘	西 島 安 則
片 岡 昇	西 原 宏
加 藤 幹 太	半 田 肇
近 藤 良 夫	半 田 良 一
佐 野 晴 洋	藤 澤 令 夫
神 野 博	溝 畑 茂
巽 友 正	翠 川 修

（五十音順）

2 第2次投票

第2次投票は、11月17日午前9時から同10時まで、第1次総長候補者16名に対して、単記により行われた。投票総数911票、うち有効投票数は906票、無効投票数は5票であり、次の3名が第2次総長候補者に選ばれた。

西 島 安 則
溝 畑 茂
巽 友 正
（得票順）



臨時評議会終了後記者会見する西島教授

3 第3次投票

第3次投票は、同日正午から午後1時まで、第2次総長候補者3名に対して、単記により行われ、投票総数930票、うち有効投票数は918票、無効投票数は12票であり、各候補者の得票数は次のとおりであった。

西 島 安 則	559票
溝 畑 茂	210票
巽 友 正	149票

この結果、西島安則教授が得票過半数を得て第3次総長候補者に選ばれた。

4 選 考

臨時評議会は、このあと同日午後3時から開催され、選挙の結果に基づき、次期総長候補者として西島安則教授を選考し、同氏はこれを受諾した。

西島安則教授の略歴

本籍地 京都府 大正15年11月17日生

昭和24年3月 京都大学工学部卒業

昭和24年4月 京都大学大学院特別研究生（昭和29年3月修了）

昭和29年4月 京都大学化学研究所において堀尾教授指導の下に研究に従事

昭和34年4月 京都大学工学部講師

昭和37年3月 工学博士（京都大学）

昭和38年11月 京都大学工学部助教授

昭和44年4月 京都大学工学部教授

昭和50年7月 京都大学学生部長（昭和51年8月まで）

昭和53年11月 京都大学評議員（昭和54年3月まで）

昭和54年4月 京都大学工学部長（昭和56年3月まで）

学術講演会の開催

11月11日(月)午後2時15分から、京大会館101号室において、昭和60年度秋期学術講演会が、また、附属図書館A・Vホールにおいて、本学主催による特別講演会がそれぞれ開催された。

講師と演題は次のとおりであった。

1. 昭和60年度秋期学術講演会

講師 Nils R. Ringertz 教授

(スウェーデン王国カロリンスカ
研究所教授、ノーベル生理学・
医学賞選考委員長)

演題 Developments in modern
genetics (近代遺伝学の進展)

2. 特別講演会

講師 Lars Gyllenstein 教授

(スウェーデン学士院・作家、
ノーベル文学賞選考委員長)

演題 ノーベル文学賞と非ヨーロッパ言語

なお、両教授は、このたび本学の招きにより来学されたノーベル財団関係者(Sune Bergström ノーベル財団理事長外7名)であり、この講演は招待期間中に行われたものである。

昭和60年度京都大学市民講座「生命を考える」

講演要旨Ⅲ

受精卵の人為操作と 家畜の改良・増殖

農学部教授 入谷 明

生殖生理学分野の基礎的研究の積重ねと、研究成果の組合わせによって家畜の改良増殖を効率化するためのいくつかの新技術が開発されている。

1. 人工授精：新しい技術とはいえないが、家畜の改良増殖に大きく貢献してきた技術の一つである。たとえばウシでは1回の自然交配で雄ウシは約50—70億の精子を放出するが、人工授精で受胎に必要な注入精子数は2,000万で十分である。したがって1回の射精液を希釈して使うことによって200—300頭の雌ウシに授精でき、その結果少数精鋭の雄ウシを効率よく使って雄側の優良遺伝子を急速にばらまくことができる。

2. 受精卵移植：上記の人工授精の効果は、雄側の優良遺伝子の効率利用であるが、受精卵では雌雄両方からの遺伝形質をうけついでおり、非常にすぐれた雄と雌からの受精卵を過剰排卵処理によって一度に多数回収し、これを借り腹で移植して産子をえることによって、一度に雌雄両方の遺

伝子を効率よく利用できる。

3. 1卵性複数子の生産：上記受精卵の移植において、移植卵をさらに2分断して移植し、1卵性双子を生産することができる。また4—8細胞期卵の割球を分離して、それぞれの分離割球から1卵性4—8つ子の生産も可能になってきている。これら1卵性複数子の生産によって①すぐれた遺伝形質をそなえた家畜を急速に増数することができ、②また実験動物として利用価値の大きい遺伝的同型子がえられる。

4. キメラ動物の生産：直接家畜の改良に結びつくか否かは疑問であるが、医学や免疫学の研究に効果的に使いうると思われるキメラ動物が作られるようになってきている。同一種内は勿論、異種間での「ヒツジヤギ」もすでに生産されている。

5. 遺伝子導入動物の生産：一般に受精後間もない前核期受精卵の雄性前核に外来遺伝子がプロモーターとともに注入されるが、移植して産子がえられ、注入遺伝子(たとえば生長ホルモン生産遺伝子)が組みこまれ、発現した場合には、かのスーパーマウスにみられるように、大型動物がつくられる。この考えや方法をウサギ、ヒツジ、ブタなどに応用する試みが欧米各国で盛んに行われ、すでにいくつかの成果が報告されている。なおウシやブタで確立されているすぐれた体外受精法は、これらの種では入手し難い前核期卵の供給

を容易にし、将来遺伝子操作技術に有効に応用されるであろう。

(11月2日)

生命と生といのち

文学部教授 上田 閑照

我々は生きている。確かに、生きている。然しほんとうに生きているかと問われるならば、果してほんとうに生きているだろうかと自問せざるを得ない。そこに既に、我々が生きているということが我々自身にとって一つの大きな問題であるということがあらわれている。そこから「生命を考える」ということも起ってくる。然し、生命とは生きたもの、元来生きられるもの、それを「考える」とはどういうことか。考えることによって生き生きしたところが失われることにならないかどうか。或は、逆に自覚的に生きることになるのであろうか。

少くとも、人間として生きる生命は「それ自身を考える生命」ということが出来る。これを人間についての対象知的な規定とするならば、古来の「理性をもてる生物（動物）」という定義に通ずるであろう。それに対して、自分自身が生きているそのところで受取るならば、生命の自覚をあらわすであろう。一方生命についての対象知は対象知の性格からして際限なく（人間ということが見失われる程に）増大可能であり、他方生命の自覚は自覚として限りなく（人間として生きるというだけでは尽せない程に）深まり得るであろう。

「生命」と言い、「生」と言い、「いのち」と言う。そこには、我々自身「生きている」ものとして「生きている」ことをどう自覚しているかその自覚の諸相乃至は諸層があらわれていると言えよう。言葉の実際の使用において一義的に区別することは出来ないが、含蓄の顕著な特色からすると、「生命」とは生物一般に通ずる生命を言い、「生」とは生活や人生としての人間的生を言い、「いのち」とは、ものの「いのち」或はほとけの「いのち」とも言い得るように生物的生命や人間的文化的生とは質を異にした根源的ないのちを言う。学とのかかわりで言えば、「生命」に関しては「生命科学」であり、「生」に関しては「生の

哲学」であるが、「いのち」に関しては学は成り立たず、文学や芸術や宗教がその自覚の遂行となるであろう。又、人間的「生」からすると、一方生活という面では「生命」とのつながりとそこからの飛躍が問題になり、他方人生という面では「いのち」にふれてゆく方向がある。衣食住を基盤とする文化的生としての生活は「生命」以上の豊かさをあらわすが、この「以上」は又「生命」自身の創造的發展から生み出されるものと言い得る。それに対して「いのち」の根源性は、「生命」に対してはその否定としての「死」、生命以上の豊かさ（文化的生）に対してはその否定としての「貧」ということを通してはじめて端的に生きられ得るものである。

生物に対して人間的生のきわ立ったあり方として理解されている最も基本的な事態は「世界に開かれている」ということである。「動物がその生理学的、形態学的特性によって環境世界に正確かつ完全に閉鎖的に適合しているのに対して、人間は無制限に世界開放的に行動し得る」(M. シェーラー)。「動物の本能的な行動を<環境に制約された>とよぶならば、人間の行動は<世界に開かれ>、そして決断の自由をもつといっていいたいだろう」(A. ボルトマン)。この世界開放性は、人間に特有な直立姿勢と結びついている。直立とともに単なる環境世界を超えた展望が開かれるが、その開けに於て投企された世界に則って、直立によって自由になった手を以て環境世界に手を加えて行くところに、人間的生の根本的特色がある。この世界開放性を人間存在の基礎構造として徹底的かつ包括的に把握したのが M. ハイデッガーの「世界内存在」としての現存在（人間存在）という見方である。

我々は他者と交わりつつ物とかかわりつつ生きているが、それは我々の存在が、他者と交わり物とかかわり得る場にはじめから開かれているからである。その都度の具体的な場を含む包括的な意味空間を「世界」とすれば、我々の存在は世界内存在として規定される。このようなハイデッガーの見方を受け入れた上で次の二つの点を特に付け加えたい。第一は、我々が自らを世界のうちに見出す場合さし当っては我々自身を世界の中心に据えるような仕方で見出すということ。そしてこの

ことは世界に或る歪みをひきおこしているということ。第二に、世界は意味連関によって張り渡されている空間として本質的に限られており、従って、世界が世界をこえた限りのない開けに包まれているということ。この第二の世界の真実相は然し第一の事態の故に通常は掩われてしまっている。この掩われた真実相が何らかの仕方で現前することが広い意味で宗教といわれるあり方である。それは我々が「死して甦える」こと「死から生きる」ことであり、世界のうちにありながら「もう一つ別次元」(M. エリアード)に開かれていることである。そこで根源的な「いのち」が生

きられる。

「いのち」について語ることが出来ない。我々の出来ることは「いのち」が語る言葉、「いのち」の言葉をただ聴くことである。例えば――

いのちありて帰還の途次にあふぎたる

あわれ夕ぐれの富士を忘れず

一帰還兵士の歌うこの「あわれ」という感歎は彼の隣りで、彼のすぐ近くで死んだ数多くの死者達に届いているであろう。或は西行法師の――

年たけてまた越ゆべしと思ひきや

命なりけり佐夜の中山

(11月2日)

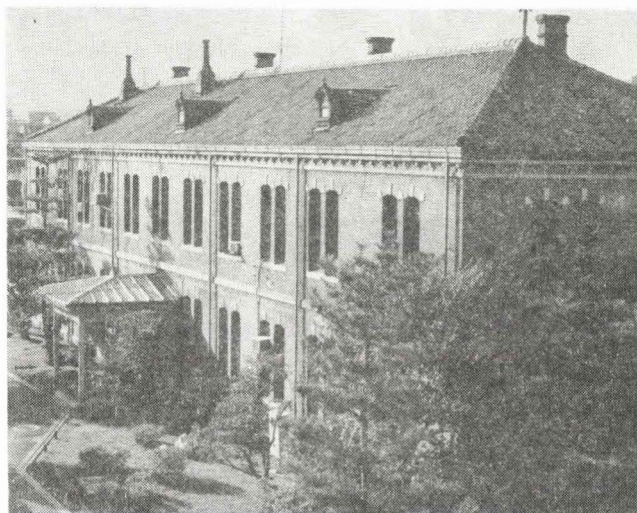
＜紹 介＞

医学部生理学教室

医学部生理学教室は明治32年に設置され、明治35年に建造された赤レンガの建物が現在でも生理学教室の本館として使用されている。教室員は今建設中の新研究棟に来年移転することになっているが、移転後もこの赤レンガの本館は歴史的建造物として保存される予定である。設立以来八十数年の歳月は確かに誇り得る歴史であるが、その建物の居住者にとってはそれなりの苦労もある。窓を全部閉じた積りでも冬には隙間風が入り、夏には蚊とムカデが絶えず出現する。最新のエレクトロニクスの機器を使用して実験している横に蚊取り線香がただよっている光景はなんとなくちぐはぐな印象を与える。堅固に造られた古い建物だけに、一度雨漏りが始まると修繕も容易でない。高価な実験機器に降りかかるひどい雨漏りが起った時も、結局は、機器の上に2メートル四方のトタン屋根を屋内にとりつけ、そこに溜る雨水を流しに導くことによって防いだ。営繕担当の人のこの迅速な処置によって問題は解決したわけだが、訪問者が訝しげに屋内のトタン屋根を眺めると、つい足早に次の研究室に案内することになる。

生理学教室の初代教授は天谷千松教授であった。大正元年に、生理学教室第二講座

が新設され、新設講座には石川日出鶴丸教授が就任した。両教授とも目出度い門出に相応しいお名前である。石川教授は欧州留学中に学んだ神経の興奮伝導に関する研究を続けられた。大正5年に本学医学部を卒業した加藤元一氏は石川教授の講座で学び、2年後の大正7年には慶応大学医学部の生理学教室の初代教授として赴任された。良き古き時代と言える。加藤教授も、石川教授の流れを受けて神経生理学を専攻したが、大正12年に九州大学で開催された生理学会において、麻酔下の神経の興奮が減衰的に伝導するか、不減衰的に伝導するかに関して石川教授と加藤教授が烈しく論



明治35年建造の生理学教室本館

争し、この論争はその後数年にわたって続けられ、当時のジャーナリズムの話題にまで発展した。この期間、石川教授の教室でも、加藤教授の教室でも、それぞれの主張の立証のために昼夜をわかつた実験が繰り返えされたと言われている。加藤教授は昭和2年に不滅伝導に関する研究によって学士院賞を受賞し、この論争にも終止符が打たれたように思われる。

この論争自体は別として、この時期に本学でも慶応大学でも神経生理学を伝統とする気風が築かれたように考えられる。伝統ある研究分野を築いたと言うのも良き古き時代の名ごりである。この伝統は、本学では中枢神経の研究として、慶応大学では視覚生理学と神経化学として今でも多少存続している。しかし、科学の進歩が急速になり、研究方法が多岐にわたるようになった現在では、もはや伝統ある研究分野にばかりこだわっている

わけにもいかない。米国のある有名な神経解剖学者が、現況を評して、解剖学で樹立された新しい研究トピックは数年続くが、生理学の新しいトピックは数か月で終り、生化学のトピックは数週間に入れ替ると話していたが、科学の世界もあわただしくなって伝統を維持する閑もない。米国では、ヤッピー族 (Yuppies; young upward-pointing mobile people) と言うスラングが最近登場してきたと聞いている。これは、昇進だけを目ざして世間をうまく渡ろうとする若い人々のことを指すそうである。ヤッピー族が科学の世界にも侵入して中途半端な研究に終始するようになるよりは、古典的な研究を地道に進める方がまだましであるが、新しい時代に挑戦している若い研究者が次どのような生理学教室を築くかを見るのは楽しみである。

(医学部)

<資 料>

学術情報センターの創設に関する 国立大学協会の要望書

このたび国立大学協会会長から、学術情報センターの創設に関し、以下の要望書を関係方面に提出した旨報告があった。

昭和60年10月29日
国立大学協会会長
森 亘

要望書の提出について

学術情報センターの創設については、予てより本協会図書館特別委員会において促進に努めてきたところがありますが、これの速やかな実現を図るため今般関係方面にこの旨要望することとし、理事会の了承を得て去る10月21日松田副会長・松山図書館特別委員会委員長が要望書を携えて文部省・大蔵省及び総務庁を訪れ趣旨説明のうえ配慮方を要請いたしました。

以上、学術情報センターの創設について緊急に処理いたしましたので同要望書の写を添えここに報告いたします。

昭和60年10月11日
国立大学協会会長
森 亘

学術情報センターの創設に関する要望書

昭和55年1月学術審議会より学術情報システム整備について答申が発表された際、国立大学のみならず、公私立大学の研究者その他の関係者も、その構想がわが国の学術研究のすべての領域にまたがる共通の基盤を確立するものであるとの認識から、等しくその早期実現を期待したものであります。しかしながら、その後システムの中枢機関となるべき学術情報センターが未だ設置にいたらず、システム全般の整備が大幅に遅延している事態は、この大きな期待を損うこととなつてのみならず、学術情報の逐年多量・多様化の中にあつて、研究活動の進展にいいよ支障を来す結果となつています。

今日、国際社会において、我が国が独創的、先端的学術研究の振興を図っていく上で、学術研究情報の流通体制を確立することは、最も基本的条件をなすものであります。国の財政事情も極めて逼迫している時局ではありますが、学術情報システム整備の促進に向け、下記の事項につき貴職の特段の御配慮、御協力の程お願い申し上げます。

記

1. 学術情報センターの創設

本構想による学術情報センターは、全国の国公立大学を通信回線で結び、各種の学術情報の蓄積、形成、提供を行うわが国の学術研究情報流通の、まさに中枢的役割を果たす機関である。また、同センターは、諸外国の研究情報センターとも連携することによって、わが国の学術振興に寄与するとともに、学術研究に関し国際社会においてわが国の担うべき責務を果たす上でも、不可欠な機関となるべきものである。

この構想を実現するため、昭和58年度から発足した東京大学文献情報センターは、本年度から数大学との間で一部サービスを開始する段階に至っているが、学術情報センターに期待されている組織体制やサービス内容からは程遠い状況である。一方、これを基盤として新たに発足させようとしている学術情報センターに

ついては、文部省での数年にわたる調査は既に終了しており、さらに文献情報センターでの一部サービスの開始によつて、学術情報センター設置のための諸準備はすでに完了しているものと理解される。

以上の点にかんがみ学術情報センターが最も早い機会に創設されることを強く要望するものである。

2. 学術情報ネットワークの整備

前述のとおり学術情報システムは、学術情報センターと全国の国公立大学とのネットワークにより、学術文献の目録・所在情報や二次情報の検索・提供等の各種の情報サービスを行うものである。従つて、学術情報センターの創設とともにネットワークの主要構成機関である図書館、大型計算機センター、情報処理センターの充実、発展が、このシステムを構築する上で不可欠の条件となつており、これら機関の整備についても格段の配慮をあわせて要望するものである。

白馬山の家の冬季開設

本学の学生及び教職員の厚生施設として、例年夏季及び冬季に開設されている白馬山の家を、今冬も下記により開設します。

この山の家は、中部山岳国立公園白馬山麓の^{つがいけ}樽池高原にあり、雄大な北アルプスの峰々に囲まれ、積雪量も多く、雪質の良さとともにスキーには絶好の条件を備えており初心者向きから上級者向きまで各種のゲレンデがあります。

なお、建物は山小屋風の木造地上2階、地下1階建て、間取りは1階が食堂兼談話室、2階が寝室（ベッドで42名収容）、地階が浴室、乾燥室等からなっています。

1. 名 称 京都大学^{はくぼ}白馬山の家

2. 所在地 長野県^{あづみ}北安曇郡^{おたり}小谷村^{ちくに}大字千国
字柳久保乙869の2

(交通機関)

国鉄大糸線「白馬大池駅」下車、松本電鉄バス「^{おや}親の原^{はら}」下車、徒歩約20分

3. 開設期間 12月20日(金)～1月10日(金)
ならびに2月20日(木)～4月10日(木)

4. 所要経費 1人1泊 使用料80円、暖房料50円、ほかに食費等実費程度

5. 申込み及び利用に関する詳細は、体育会事務室(西部構内総合体育館内、電話学内2574)に照会してください。

(学生部)

計 報

島 芳夫(本学名誉教授・文学博士)

11月14日逝去、83歳。本学文学部卒業。昭和21年本学

文学部教授就任、41年退官。その間評議員(34年～35年)を併任。同47年勲三等瑞宝章受章。専門は倫理学。

